東京家政学院筑波女子大学紀要第４集　131～141ページ　2000年

動詞補語となる不定詞と補足節の交替に関する記述的研究

佐藤　淳一

A descriptive study on the alternation of the infinitive and the “que”-clause as verbal complement

Jun-ichi SATO

Abstract

This study attempts to explain the mecanism which determines the choice of the constructions: infinitive and “que”-clause, as verbal complement.

We will point out, on the one hand some inherent properties of each of the two constructions, and on the other hand various factors which belong to the domain of sentence or that of discourse. We will observe semantical interactions between the two elements, and the process of composing the complete sentences.

キーワード　不定詞、補足節、動詞補語、目的補語、限定補語

１．研究の目的

一般に、動詞の目的補語や限定補語として用いられる不定詞は、名詞化されたものを除き、動詞と同様に独自の補語や主語相当句を取り、１つの節を構成するものと見なされる。そこで、以下の（1）a、（2）aの不定詞構文は、それぞれ（1）b、（2）bのような補足節を含む複文と概ね同じ意味内容を持つとされる。

（1）a　J’espère <u>venir</u> demain [1].
　　b　J’espère <u>que je viendrai</u> demain.
（2）a　Elle nous a assuré <u>l’avoir vu</u> la veille.
　　b　Elle nous a assuré <u>qu’elle l’avait vu</u> la veille.

このような不定詞と補足節は、これらの文における使用を見る限り、発話者により比較的自由に選択され得るヴァリアントであるよ

うに思われる。ところが、実際には(3)に見られるように、文中に共起する要素の性質により構文の使用が制限される場合や、(4)、(5) のように、元から一方の構文しか考えられない場合も多い。

(3) a　Je veux partir demain.
　　b *Je veux que je parte demain.
　　(cf. Je veux qu'il parte demain.)
(4)　Je vais partir demain.
(5)　Il a découvert qu'il s'était trompé.

また、(1)、(2) のような文についても、実際には伝えられる内容に微妙な差異があり、発話者によりいずれか一方が選択され用いられることになる。

こうしたことから、２つの構文はそれぞれが固有の価値を持っており、実際の文の構成においては、この価値と、文中に共起する要素との相関（(3)～(5)）、あるいは発話者の意図などとの相関（(1)、(2)）により構文が決まっていると考えられる。本論は、動詞の補語となる従属節として競合し得るこれら２つの構文について、その選択を決定する要因を明らかにするものである。

２．従来の記述

多くの伝統文法は、例えば、WARTBURG-ZUMTHOR (1947)、BONNARD (1950)、WAGNER-PINCHON (1962)、CHEVALIER et al. (1964)、MAUGER (1968)、GREVISSE (1986)、及び構文研究、例えばSANDFELD (1965a, 1965b)、VAN HOUT (1974)、WILLEMS (1981)、TOGEBY (1983) などにおいては、動詞がいくつかの意味範疇に分類され、それらと不定詞／補足節の対応関係、不定詞に先行する前置詞 (à／de) の有無、補足節における動詞のmodes (直説法／接続法) の種類などに関しての記述がなされている。すなわち、本論の対象である不定詞と補足節との競合関係についての考察は二次的な対象でしかない。

また、GROSS (1968、1975)、DUBOIS (1969) などの変形文法においては、不定詞を含む構文と補足節の構文とを形式的に結び付けることが考えられている。しかし、両者の対立により表される意味の違い、選択を決定する要因などについての記述を行っている文献はほとんどない。

これに対し、LEMHAGEN (1979) は、こうした問題を正面から取り上げている。しかしながら、その表題の“Introduction”が示すように、動詞範疇の全体についての体系的な記述は未だなされていない。

一方、曽我 (1992、1993) は、単に不定詞と補足節の用法、意味の違いだけでなく様々な観点から構文と意味の関係等を論じており、後に見るように参考にすべきことも多い。

更に、RUDANKO (1989) は、英語の動詞についてのthat節補文／for-to不定詞補文／(ø) 不定詞補文の使い分けのメカニズムを解明するには、動詞そのものの意味特徴と、３つの補文の内的な意味機能の関連に着目することが必要であるとし、様々な意味特徴と構文の組み合わせのおおまかな傾向を指摘している。RUDANKOの構文そのものの意味に対する考慮は注目に値するものであり、本論筆者もこれを次の３章で考えることにする。

３．不定詞及び補足節の本質的価値

冒頭の (3)～(5) の例について指摘したように、補語従属節としての不定詞及び補足節の使用の可否は、多くの場合、意味的要因により決まると言える。具体的には、２つの構文が持つ固有の価値と、文中に共起する動詞を初めとする諸要素との意味的な相性によることが多い。また、(1)、(2) のような文も、談話の中に組み入れられる際には、発話者により構文の価値が考慮され、自らが伝えたい内

容に合致する一方が選択されることになる。本章では、こうした構文自体に本質的な価値を確認することにしよう。これは、不定詞及び補足節の形態に由来するものである。まず不定詞について見てみよう。

不定詞というのは、人称、数、時制、法などの標識を持たず、そこで、これらの文法範疇は不定詞を支配する主節動詞に鑑みて解釈される。また、特有の主語を持たず、代わりに主節動詞の主語、目的補語などの要素を動作主とする。すなわち不定詞は、言わば動作・状態等の過程の名称として、それらの概念のみを意味すると共に、それを主節動詞及び他の文脈要素に強く依存するものとして提示する形態であると言える。

対する補足節は、その動詞が人称等を示す標識を備えていることから、主節動詞が示すものとは別の文法範疇を含むことが可能である。また、補足節は［主語－述語動詞］という構造により、単なる動作の概念のみならず、その動作主も明示し、１つの完全な出来事を、主節からは独立した形で提示する形態であると考えられる。なお、その動詞が取る法が直説法であるか接続法であるかにより、出来事が現実性を伴うものとして過去－現在－未来という時間の流れの中に位置付けられるか、現実性は問題とならずにその概念のみが示されるかの違いが生ずる。

不定詞と補足節は、こうした本質的価値を持っており、それらが構文の決定に大きく関わっている。

４．文レベルの諸要因と構文の本質的価値の相関

不定詞並びに補足節の使用は、その本質的価値と文レベル、または談話レベルにおける諸要因との相関により決まる。本章では、こうした要因のうち文レベルのものを指摘し、具体例を通じて構文が決まる過程を見て行く。

４.１　動詞の意味的特性

初めに、動詞の意味的な特性が構文決定の要因となるいくつかの場合を見る。

４.１.１　「移動」、「同行」、「派遣」の意味

まず、「移動」及びそれに類する「同行」、「派遣」の意味が挙げられよう。

「移動」：(6) ［. . . ］ j'allai me promener toute seule au bord du lac. (Simon, 66)

「派遣」：(7) Quand elle devint plus grande, on l'envoya faire la récolte des fonds de siège avariés. (Rempailleuse, 18-20)

「同行」：(8) Je t'emmène à la compagne manger des fleurs. (Zoum, 28-30)

一般に、これらの行為については、行き先となる“場所”が問題となる。多くの場合、この“場所”は、何らかの施設や地方、町などのような具象性の高い存在物であり、言語的には(a) la gare、(chez) le medecin、(en) Italie などのような名詞で表される。ところが、一見抽象的な過程がこの“場所”となることも可能である。ただし、その過程は、下記の例：

(9) Ils allèrent au spectacle, puis souper.
(SANDFELD (1978：149))

において名詞と等位され得ることからも明らかなように、「移動」先の名称に近いものとして捉えられるのであり[2)]、それゆえ、この「移動」の意味の動詞には、過程を名詞的に提示する不定詞が組み合わされることになる。

４.１.２　「意図、企て」、「推奨、強制」「試み、努力」、の意味

次に、「意味、企て」、「推奨、強制」、「試み、努力」の意味について考えてみよう。

「意図、企て」：

(10) Enfin, les constructeurs d'automobiles ont entrepris de former leurs réseaux de

distribution, afin d'éviter les abus commis par le passé. (BUSSE)

「推奨、強制」:

(11) Le capitaine m'a même invité à monter à bord. (Etiquette, 65)

(12) Pendant vingt minutes il somma cet officier silencieux de se rendre avec armes et bagages. (Prisonniers, 36)

「試み、努力」:

(13) Il essaie bien, au début, de cacher à Mme Noiret qu'il connaît le chemin... (Zoum, 68)

(14) Il s'fforçait de raisonner, de comprendre. (Cheval, 88)

一般に、「意図」する、「企て」るという行為は、この行為の主体が、未だ実現していない過程について、その自らによる実現を思い立つことである。従って、「意図」され、「企て」られる過程は、こうした心的行為の“創造物”としてのみ存在するのであり、これらの行為から切り離されては在り得ないものである。

また、これと類似するものとして「推奨」する、「強制」するという行為がある。これは、この行為の主体が、他者に未実現の過程を実現させようと思い立つことであるが、やはり過程は思考の創造物としてのみ存在するに止まっている。

一方、「試み」る「努力」するという行為は、その主体が、未実現の過程について自らによる実現を目指していくことである。この場合、対象となる過程は、この行為の遂行に伴い漸進的に産み出されていくものであり、この行為なくしては存在しないものである。

このように、いずれの行為の対象となる過程も、その存在は各々の行為に大きく依存しており、従って、これらの行為を意味する特性を持つ動詞に対しては、過程をこの動詞に従属するものとして提示する不定詞が組み合わされることになる。

４.１.３　「習慣化、脱習慣化」の意味

先の「試み、努力」と一部相通ずるものとして「習慣化」及びこの反対の「脱習慣化」という意味特性がある。

「習慣化、脱習慣化」:

(15) Il veut accoutumer son enfant à travailler.

(16) Il faut le désaccoutumer de voler.

「習慣化、脱習慣化」とは、主体が他者をして過程の実現を本格化させる、あるいは止めさせるということである。この場合、過程は「習慣化」、「脱習慣化」の行為ー例えば(15)におけるson enfant自身の努力、あるいは“親”であるilの指導などーの進捗に応じて徐々に実現の頻度を上げたり下げたりするものであり、行為への依存度が高い。そこで、やはりこの行為を表す動詞に従属する形で不定詞により提示されることになる。

４.１.４　「発見、理解」の意味

これまでは、専ら不定詞が用いられる例を見てきたが、今度は補足節が選択される場合である。

「発見、理解」:

(17) Le Petit Poucet avait remarqué que les filles de l'Ogre avaient des couronnes d'or sur la tête... (Poucet, 24)

何らかの物事を「発見」する、「理解」するというのは、それまで意識の中に存在していなかった対象を初めて取り込むということである。この対象は「発見、理解」の行為とは無関係に、予め言語外現実の世界において実現しているのであり、これらの行為からは完全に独立している。そこで、こうした行為を表す動詞には、行為の主体と過程の主体が同一であっても、過程を自律的なものとして提示する補足節が用いられることになる。

4.2　動詞の意味特性、及び主節と従属節の主体の同一性と構文の本質的価値

これまでに見た事例とは異なり、動詞が「願望」、「承諾、拒否」などの意味特性を持つ場合には、不定詞と補足節の両者の使用が可能となる。しかしながら、その交替は自由なものではなく、複数の要因の相関により一方が選択される。

一般に、何らかの過程の実現を「願望」する、「承諾、拒否」するという場合、これらの行為の主体は、対象となる過程の主体と同一であることも、異なっていることもあり得る。とは言え、いずれにせよ過程は問題の行為の主体の心的創造物に留まっているため、先の「意図、企て」の意味特性を持つ動詞と同様の理由で、不定詞が用いられることになるはずである。ところが、この２つの主体が同一であれば、確かに不定詞が用いられるのであるが、

「願望」：

（18）Pierre veux goûter ce vin.

「承諾、拒否」：

（19）Il accepte de partir demain.

両者が異なっている時には、接続法を含む補足節となる。

（18’）*Pierre veut goûter ce vin à son frère.
→（18”）Pierre veut que son frère goûte ce vin.
（19’）*Il accepte à Marie de partir demain.
→（19”）Il accepte que Marie parte demain.

これは、「願望」、「承諾、拒否」という行為が、過程（goûter, partir）とその主体（son frère, Marie）を一括して捉える性質のものであることによると思われる。結果として、出来事をひとまとまりに提示する価値を持つ補足節が選ばれることになる。

4.3　主節－従属節間の時間的関係の明示の必要性

この要因は、特に「表明」や「思考」を意味する動詞について、その構文の決定に関与するものである。後に見ることであるが、これらの意味特性を持つ動詞については、文レベルで見る限り、不定詞と補足節の交替が自由であり、いずれが用いられても大きな意味の差は生じない。しかしながら、以下の例におけるように、従属節に含まれる過程が状態性であり、また、それが時間的に主節よりも後である場合には補足節が用いられ、

（20）Il parlait trop. [. . .] il m’a expliqué que [. . .]et il m’ a dit qu’il serait aussi riche que celui qui l’employait.（Etiquette, 69）

これを不定詞に置き換えると、こうした時間的な“ずれ”が明示されなくなり、曖昧さが生じる。

（20’）il m’a dit être aussi riche que celui qui l’employait.

これは、不定詞が、先の本質的特性として見たように時間の文法標識を持たないことによる。

4.4　動詞の補助要素的役割

動詞の中でも、法、時間、アスペクトなどの文法範疇を表し、一般に準助動詞、半助動詞などと言われるものについては、構文の決定に不定詞並びに補足節の本質的価値は関与せず、専ら準助動詞自体の統辞的・意味的役割がその選択を規制することになる。

（21）Paul doit／va partir demain.「Paulは明日発つに違いない／発つであろう」

という文は、その内部構造が通常の［主語－

文主動詞－目的補語（不定詞）. . .］ではなく、［主語－補助動詞（doit／va）－文主動詞（不定詞）. . .］であると考えられる。すなわち、devoir、allerは、あらかじめ形成された命題：［主語－文主動詞. . .］に対し、上述の文法範疇を付加するために後から挿入された要素なのである。この際、形式上の手続きとして、元になる命題の主動詞からdevoir、allerへ人称、数、時制、法などの標識の移譲が起こり、その結果、この主動詞は不定詞の形態を取ることになる。こうしてできあがった文の主動詞はpartirの方であるから、その主動詞の位置に節が生ずることはあり得ないのである。

５．談話レベルの諸要因と構文の本質的価値の相関

５.１　２つの構文の交替が可能な動詞の意味について

「表明」、「思考」、「依頼」、「許可」、「約束」、「期待」などを意味する動詞は、(1)、(2)の例で見たように、文単体で見る限り、その内容を変えることなく２つの構文を交替させることが可能である。言うまでもなく、これは各々の意味によるものである。そこで、本節では、なぜこれらの意味が２つの構文を可能にするのかについて、これまでの考察なども踏まえながら考えてみよう。

一般に、「表明」という行為は、ある主体が他者に対し、現実の世界において実現済み（下記（22））／実現途上（同（23））／実現予定（同（24））のいずれかである客観的事実を伝達することである。過程はこの行為とは無関係に存在するものであるため、行為の主体と過程の主体が同一でも、過程を自律したものとして提示する補足節が用いられる。

「表明」：

(22) J'<u>affirme</u> que je l'ai rencontrée ce jour-là.

(23) Il <u>dit</u> qu'il est enrhumé.

(24) Il m'a dit qu'il sortirait le lendemain.

これに対し、「思考」以下の５つの行為は、いずれもその主体の心的創造物である過程を対象とするものであり、従って、過程はまず不定詞の形態で提示される傾向がある。

「思考」：

(25) Je <u>crois</u> réussir.

「依頼」：

(26) Je lui <u>ai demandé de</u> poster ma lettre.

「許可」：

(27) Tu me <u>permets</u> de téléphoner ?

「約束」：

(28) Tu m' <u>as promis</u> de m'emmener au cinéma.

「期待」：

(29) J' <u>espère</u> vous revoir.

ところが、周知のとおり「表明」の意味の動詞が不定詞と、また、それ以外の意味の動詞が補足節とそれぞれ組み合わされるのはごく普通のことである。

(22') J' <u>affirme</u> l'avoir rencontrée ce jour-là.

(23') Il <u>dit</u> être enrhumé.

(24') Il m' <u>a dit</u> sortir le lendemain.

これは、「表明」の行為が「思考」を伴い、反対に「思考」以下の行為が「表明」も意味し得ることによると思われる。まず、「表明」の対象となる過程は、「表明」の行為の主体以外の者－特に発話者－にも明白な客観的事実とは限らず、例えば行為の主体１人の思い込み、勘違いである場合がある。

(30) Il <u>prétend</u> gagner son procès.
「彼は（十分な根拠がないのに）訴訟に勝つと言っている」
（白水社　仏和大辞典：1948）

この時、過程は彼の「表明」に先立つ「思考」の創造物に過ぎず、それゆえ、行為と過程の主体が同一であれば、主節への従属を示す不定詞により示されることになる[3)]。一方、「思考」を初めとする行為は、究極的には客観的事実の様々な形での「表明」でもあり、そのため、対象となる過程は本来の「表明」の場合と同様に補足節により提示されることも可能である。

(25') Je crois que je réussirai.
(26') J' ai demandé qu' il poste ma lettre.
(27') Tu permets que je téléphone ?
(28') Tu m' as promis que tu m'emmènerais au cinéma.
(29') J' espère[4)] que je vous reverrai.

このように、これらの動詞の意味には共通の二面性があり、その各々の面と不定詞／補足節の構文は結びついている。そして、いずれの構文が用いられるかにより、過程の提示方法が微妙に異なってくるのである。

5.2　談話レベルの要因

5.2.1　過程の現実性の明示

発話者は、動詞が表す行為の対象となる過程の性質に応じて構文を選ぶことがある。これは、まさに先ほど見た過程の提示方法の違いを利用することであり、同じ過程でも補足節により提示されれば、その現実性が強調され、不定詞により示されればそれが明示されなくなる。

曽我（1993：76）は、「判断」の動詞penser（本論では「思考」の動詞としたもの）の例を取り上げ、

(31) J' éternue tout le temps. Je ne sais pas ce que j'ai. Je pense être allergique aux poils des chiens／que je suis allergique aux poils des chiens.

(32) Rassurez-vous. Il m' est déjà arrivé de faire face à ce genre de situations. Je pense en être capable／que j' en suis capable.

発話者は、まず（31）のように、「思考」の主体（je；この場合は発話者自身である）が１つの事柄についての判断にそれほど確信を持っていない場合などを初め、過程をこの主体の主観世界、内面世界に属するものとして提示する場合には不定詞を選ぶとしている。一方、（32）のように、発話者自身が「思考」主体として、問題となる事柄に確信を持つ場合を含め、過程を現実の客観的世界に位置付けようとする場合には補足節が用いられる傾向があると述べている。

5.2.2　情報の新旧の明示の必要性

LEMHAGEN（1979：75）は、２つの構文を含む文を、情報構造の観点から以下のように分析し、

(33) a. // Il a proposé // que je vienne //.
b. // Il m'a proposé de venir //.
（以上、下線加筆は本論筆者による）

これらの文について、HALLIDAY（1967/68、Ⅱ：204）の“ given ” information／“ new ”information やDUCROT（1972：88-89）“ présupposé ”／“ posé ” などの概念により，情報構造の観点からの説明を試みている．本論筆者は、このうちの情報の新旧の区別に着目し、これが構文選択の要因となることを指摘しようと思う。

先の（33）の例でも明らかなように、aの文においては、接続詞queを境に主節の行為と対象となる過程が完全に分離し、２つの情報断片を構成しているのに対し、bの文では後者が前者に従属し、両者が融合して１つの情報となっている。こうした情報構造上の特性により、各々の構文を含む文は、談話の流れ

の中において使い分けられることになる。

まず、いくつかの出来事（下記 ①、②、③ . . . ）をいずれも新たなものとして次々に並べて行く場合、換言すれば、物語が淡々と進行し、新情報のみが続けて語られる場合には、不定詞の構文が用いられる。

(34) ① Une tante m'a légué un vieux chat d'Angora, qui est bien la bête la plus stupide que je connaisse. ② Je le respecte comme une ruine, mais ③ J'avoue attendre sa mort avec une certaine impatience. ④ Il sommeille continuellement, vautré comme un paquet de graisse; ⑤ ses longs poils en font une masse informe, une sorte de boule molle et inerte. (Paradis, 4)

(35) Après avoir marché un long moment, ① les sept frères s' étaient perdus. ② Le Petit Poucet grimpa en haut d' un grand arbre [. . .] ③ il aperçu une lueur et ④ décida de marcher dans cette direction. Après bien des frayeurs, car ⑤ ils croyaient entendre de tous côtés le hurlement des loups, ⑥ ils arrivèrent à la maison où était la lumière (Poucet, 22)

一方で、特に話が進行する中で、旧情報と新情報を関連付けて並べる場合、換言すれば、談話の進展において、先行文脈内にある出来事を繰り返し示し、これに新情報を追加して語るときには補足節の文が用いられる。

(36) Un jour sur deux, Henriette retrouvait l'accordéoniste dans la chambre qu' il occupait rue Gabrielle. Elle l' aimait éperdument sans pourtant renoncer à l'amour de Martin. Dédé, qui avait l'orgueil légitime de sa qualité d' artiste, prétendait se soustraire au devoir de fidélité, Il disait qu' il était une abeille qui s' en allait butinant pour enrichir sa sensibilité d'accordéoniste.

この例では、主節であるIl disaitが、前文のDédé [. . .] prétendait. . . (「彼は～のように言い張っていた」) という「彼の表明」という文脈を受け、「(更に) 彼が言うには」というように旧情報を表し、これに続く補足節以下が新たな情報を提示している。

(37) A Paris tous se vend : les vierges folles et les vierges sages, les mensonges et les vérités, les larmes et les sourires.

Vous n' ignorez pas qu' en ce pays de commerce, la beauté est une denrée dont il est fait un effroyable négoce. [. . .]

Tout ceci est juste et logique. [. . .]

Mais je vous avoue que j'ai été réellement surpris, lorsque j' ai appris hier qu' un industriel, le vieux Durandeau [. . .] a eu l'ingénieuse et étonnante idée de faire commerce de la laideur. (Repoussoirs, 26)

また、この例では、物語の主人公が話の冒頭からいくつかの事柄を挙げ、「これらのことはみな事実だ」というように、それらの事柄を事実として認定すると述べている。その延長線上に、Mais je vous avoueとあり、「しかし、(更に) 認めなければならないのは」というように前文脈を受け、これを旧情報として示し、それに補足節以下の内容が新情報として付加されている。

５.２.３　言語レベル、及び文体への配慮

SANDFELD (1978 : 88-89) は、「表明」の動詞、「思考」の動詞などについて、特に文学語においては不定詞が用いられ、他方、口語においては補足節が用いられる傾向があることを指摘している。以下の例では、bの方が文語的ということになる[5)]。

(38) a. Elle nous a assuré qu'elle l'avait vu la veille.
b. Elle nous a assuré l'avoir vu la veille.

発話者(あるいは作者)は、こうした言語レベル、あるいは文体への配慮から構文を選択することが可能なわけであるが、構文間のこうした差異は、動詞の意味や構文の本質的価値に由来するものではない。BRUNOT (1965：339) やLE BIDOIT et al. (1971：306) が指摘するように、不定詞を用いた構文 (不定詞節 la proposition infinitive) はラテン語から存在していたのに対し、補足節の構文はロマンス語、とりわけフランス語に特徴的な構文であり、この歴史的起源の差が不定詞の構文を文語的と感じさせていると思われる。

5.2.4　動詞の名詞化の必要性

SANDFELD (1978：91) は、

(39) Il lui faudrait finir sa version latine. La finir? Il pouvait bien dire la faire du commencement jusqu'à la fin.

のような例を取り上げ、下線部分は、“ se servir de l'expression : la faire. . . ”、“ choisir le mot《faire》au lieu de《finir》. . . ” に等しいことを指摘している。すなわち、faireは実際に行われる過程を表すのではなく、それを表す名称として用いられているのであり、まさに不定詞の本質的価値が活用されているのである。言語表現そのものを表すこうした不定詞は、もちろん補足節への置き換えは不可能である。以下のような例についても同じである。

(40) Monsieur désire?－Déjeuner, mademoiselle. －Ce serait plutôt dîner, car il est trois heures et demie. Disons dîner, si vous voulez.

6．まとめ

統辞的にはいずれも動詞の目的・限定補語の機能を持つ不定詞と補足節であるが、以上見てきたように、その使用は様々な点において意味的制約を受ける。これは、各々の構文が、その形態に由来する明確な価値を持っているためであり、その結果、これらの構文は、文、更には談話に組み込まれて、多種多様な要因との相関によりその使用が決定されるのである。

[注]

1）例文のうち、特に出典の記されていないものは、辞書、文法書に記載されていたものを、本論筆者がインフォーマント調査により文法的、意味的妥当性を確認した上で引用したものである。

2）「移動」の動詞に後読する不定詞と、場所を表す状況補語である名詞 (正確には前置詞＋名詞から成る前置詞句) の類縁性は以下のような例からも明らかである。

－Où court-il?
－Il court chercher son frère.

－Il court chercher son frère?
－Oui, il y court.

これらの例において、不定詞は、通常こうした名詞を問う、あるいはその代理をする要素と関連付けられており、このことから両者は同じ機能を持っていると言える。

3）問題の過程が主節動詞の表す「表明」よりも時間的に後に起こるものであれば、4.3において見たように不定詞の使用は制限を受けることもある。

4）4.2で見た「願望」の意味の動詞については、2つの構文が一応明確に使い分けられていた。ところが、ここに挙げた動詞については、意味は似ているものの、主節と従属節の主体が同一であっても補足節の使用が可

能である。この違いは、問題の動詞が「願望」に加え、その提示、すなわち「表明」を表していることによると思われる。仏和辞典に多く見受けられる「～を期待します」、「～を祈ります」という和訳はまさにそのことを表しているのであり、それゆえ補足節も用いられ得ると考えられる。

５）SANDEFLDの指摘を根拠にした本文の記述と矛盾するが、インフォーマント調査の中で

a Elle me hait de ce que je l'ai critiquée.
b Elle me hait de l'avoir critiquée.

の対については、補足節を用いたaの文の方が高尚な文体に感じられるとの意見もあった。この理由は不明であるが、主節動詞が感情の動詞であること、更に補足節がこの動詞の直説補語、あるいは限定補語ではなく、文全体を修飾する状況補語であることと何らかの関わりがあるかも知れない。

出　典

AYMÉ, M.　：Derrière chez Martin.

PERRAULT, Ch.　：Quatre contes d'après Charles Perrault,
《Cendrillon》,《Le Petit Poucet》,《Le Petit Chaperon rouge》,《Barbe-Bleue》.

DELABY, L.　：Zoum et les autres.

ASTRUC, A.　：Le Rideau cramoisi.

ZOLA, E.　：Contes,
《Le Paradis des chats》,《Les Repoussoirs》.

MAUPASSANT, G de ：短篇集
(1)《La Rempailleuse》,《Première Neige》,《Clochette》.
(2)《Le Papa de Simon》,《La Folle》,《Clair de Lune》,《Les Bijoux》.
(3)《Les Prisonniers》,《Mon Oncle Jules》,《A Cheval》.

TAVERNIER, B.：《La Vie et rien d' autre》, Avant- Scène Cinéma, N°388.

参考文献

BONNARD, H.（1950）: Grammaire française des lycées et collèges, 2eéd., SUDEL, Paris.

BRUNOT, F.（1965）: La pensée et la langue, 3eéd., Masson, Paris.

CHEVALIER, J. -C. et al.（1964）: Grammaire Larousse du français contemporain, Larousse, Paris.

DUBOIS, J.（1969）: Grammaire structurale du français : la phrase et les transformations, Larousse, Paris.

DUCROT, O（1972）: Dire et ne pas dire. Principes de sémantique linguistique, Larousse, Paris.

GREVISSE, M.（1986）: Le bon usage, 12eéd., Duculot, Paris-Gembloux.

GROSS, M.（1968）: Grammaire transformationnelle du français. Syntaxe du verbe, Larousse, Paris.
－（1975）: Méthode en syntaxe, Hermann, Paris.

HALLIDAY, M. A. K.（1967/68）:《Notes on transitivity and theme in English》, Journal of Linguistics, 1967/68, vol. 3, II, pp.199-244.

LE BIDOIT, G. et al.（1971）: Syntaxe du français moderne. Ses fondements historiques et psychologiques, 2eéd., Picard, Paris.

LEMHAGEN, G.（1979）: La concurrence entre l'infinitif et la subordonnée complétive introduite par que en français contemporain, I. Introduction, Univ. d'Uppsala.

MAUGER, G.（1968）: Grammaire pratique du français d'aujourd'hui, Hachette, Paris.

RUDANKO, J.（1989）: Complementation and case grammar, State University of New York Press.

SANDFELD, K.（1977）: Syntaxe du français contemporain, les propositions subordonnées, Droz, Genève.
－（1978）: Syntaxe du français contemporain, l'infinitif, Droz, Genève.

TOGEBY, K.（1983）: Grammaire française, vol.III, Akademisk Forlag, Copenhague.

VAN HOUT, G.（1974）: Franc-Math. III. La proposition, Didier, Paris.

WAGNER, R. -L., PINCHON, J.（1962）: Grammaire du

français classique et moderne, Hachette, Paris.

WARTBURG von, W, ZUMTHOR, P.（1947）: Précis de syntaxe du français contemporain, 4ᵉéd., Francke, Berne.

WILLEMS, D.（1981）: Syntaxe, lexique et sémantique. Les constructions verbales, Gent.

曽我祐典（1992）:『フランス語における状況の表現法』、白水社。

－（1993）:「je pense＋inf.／que je. . . 」、『フランス語学研究』第27号、日本フランス語学会。